校友時報

昭和60年3月7日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

卒業式

自らの道を求めて

青春の思い出を胸に

今日三月七日、第三十七期生三百十一名がこの学び舎を巣立って行く。

昭和五十七年、ヒフェウマ年生まれに当り志願者数が少なく、全員入学でスタート。この年から教育課程が変更され、現代社会、理科Ⅰという新教科が登場した。また、その年には女子便所が増設されたり、自転車のステッカーのデザインや上足ロッカーが新しくなるなど、「古」から「新」へ変わる年であった。

しかし、その翌年の五月二十六日には、日本海中部地震にみまわれた。この日、本校は中間テスト三日目だったが、校舎一部破損や断水、通学列車の運休などのためテストも六月一日に延期された。また、この年には、採算がとれないという理由で「スクールバス全面廃止か？」の声もあがっていた。しかし、定期券購入を条件に冬期間のみ再開されることになった。スポーツ面では毎年恒例の四十キロ強歩で二、三年のとき男女優勝と、意地のあるところを見せた。

さらば校舎よ！

卒業生はこれら多くの思い出を胸に、それぞれの道を進んでほしい。

卒業生におくる

校長　三田元悦

卒業生の皆さん、ご卒業を心からお祝い申し上げます。

いよいよ明日からは、三年間着馴れた制服を脱いで各人同様、自分の目的に向ってそれぞれの道を歩んでいくわけでありますが、その旅立ちにあたり、まずもって皆さんの前途に幸多からんことを心から祈念するものであります。

さて、これから進む皆さんの人生航路は、これまでの高校時代のように、いつも大人からの保護の手が差しのべられて安全航海をするというわけにはいかず、常に一人前の大人としての人格をもった青年として、その責任が問われていくものであります。

しかし皆さんの人生経験はまだまだ浅いだろうし、その舵ともまだ未熟であるところから判断を誤ったり、よしとしてやった行動が失敗に終ったり、時には挫折感を味わうようなことに遭遇することがしばしばあるものと思います。こんなとき、ややもすれば他に責任を転嫁してみたり、自暴自棄になりがちなものでありますがこういうときにこそ、人間の真価が問われる機会と考え、これまで培ってきた気力・体力を奮い立たせて再びの挑戦をしてほしいと思います。

なんといっても、青年は年輩の大人と違って、やり直しのきく時代であり、目的向ってたどりきに前進することのできる時代であります。そして、つまずいた時にはもう一度スタートラインに立って、自分の目標を見定めて行動はたとえ失敗しても次の行動への洞察をもつことができ、成功の方向づけを得ることができます。

どうか、生き甲斐と誇りをもつことのできる自分の目標をしっかりと構築されるよう、また、いかなる試練にもたくましく立ち向っていく自己練磨にもして努められるよう願ってやみません。"憂きことの、なおこの上に積まれかし、限りある身の力試さん"。これが青春時代の心意気というものではないでしょうか。

しかし、それがためには自分の目指す目標をしっかりと見定めている必要があります。目標のない行動は常に試行錯誤となりますが目標を見定めての行動はたとえ失敗しても次の行動への洞察をもつことができ、成功の方向づけを得ることができます。

どうか、生き甲斐と誇りをもつことのできる自分の目標をしっかりと構築されるよう、また、いかなる試練にもたくましく立ち向っていく自己練磨にもして努められるよう願ってやみません。"憂きことの、なおこの上に積まれかし、限りある身の力試さん"。これが青春時代の心意気というものではないでしょうか。

本校新教頭に川手純夫先生

菊地忠一教頭先生が、病気療養で入院することになったため、後任として川手純先生が一月四日付で本校教頭に就任された。

川手教頭先生は山梨県甲府市の出身で甲府中学（現在の甲府一高）、早稲田大学文学部を卒業後昭和二十九年大館鳳鳴高校教諭、五十三年十和田高校教諭、五十八年小坂高校教頭を歴任され今回本校の教頭になられたものである。

川手教頭先生の家族は奥さんと子供二人。しかし、奥さんは大館市、子供二人は東京に住んでいるために、能代市松美町にある本校の公舎には一人で住んでおられる。

菊池教頭、佐藤（純）先生教員生活にピリオド

この三月で本校の二名の先生が長い教師生活にピリオドをうたれることになった。

お二人は、菊池忠一教頭先生とおとなしい印象が残っている。もうお二人は佐藤純一先生で、理科Ⅰのαを教えていらっしゃるかたか「αじいさん」の愛称で、生徒の間で親しまれている。

お二人の先生は三学期欠ってお体調をくずされて今は入院中でいますが、先生方に、今までの思い出などを語っていただいた。

菊池教頭先生の話

今まで三十三年間教師をやってきて思い出はたくさんありますが、中でも一番心に残っていることは、本校が昭和四十九年の秋に樽子山からこの高台の地に引越したことです。その時は交通や進学の問題などいろいろあって、それにがんばって打ち勝ったことです。今の生徒はなっしゃっなのです。たくさん卒業式・離任式には出席出来ないのでそれが残念です。

最後に本校躍進を心から祈ってきて思い出はたくさんありますが、中でも一番心に残っていることは、本校が昭和四十九年の秋に樽子山からこの高台の地に引越したことです。その時は交通や進学の問題などいろいろあって、それにがんばって打ち勝ったことです。今の生徒はなっしゃっなのです。たくさん卒業式・離任式には出席出来ないのでそれが残念です。

佐藤先生の話

小坂鉱山で働いた時、体員合いを感じて以来、教師になって三十六年間がんばってきました。能代高校に来て六年になりますが、本校の先生方はとても人間味があり個人的な付き合いが出来てとてもよかったと思っています。生徒といえば、かなり純い質問が飛び交い自分自身がはらはらなっちゃと思ったくらいです。生徒達には一両先生のこれまでの御指導に感謝申し上げ、今後のご健康をお祈りします。

生徒会積極的な活動に期待

この度、生徒会の新執行部員が次のように決定した。

会長　庄内　隆（一C）
副会長　桧森　直紀（一B）
会計　三熊　実（一C）
書記　本間　光悦（一C）
　　山田　富子（一B）
　　佐々木麻衣子（一C）
　　高森　奈々（一B）
　　高砂　勇（一A）
庶務　戸沢　信作（一C）
　　嶋田　健（一F）
　　佐々木正福（一G）
　　福司　宏治（一G）

新執行部

新課程初の共通一次一四二名が受験

今年で七回目の国公立大学共通一次試験が一月二十六、二十七日に行われた。本校からの出願者は百四十九名で実際受験した者は百四十二名であった。今年度は史上最低の倍率で受験生にとっては広き門となった。昨年は年からだった試験開始時間が今年は午前十時から2時まり、初日は国語・数学・外国語、二日目は社会・理科の順で実施された。新教育課程初の入試ということで進路指導部の小玉孝一先生に伺ったところ、「今年から登場した理・現社は現役が有利だと予想され、英語は新課程で単語数が減ったため浪人有利と思われていたが、実際大きな差はなかった。数学は至難しかったとしかから今年は簡単だろうという予想であったが、今年も引き続き点の取りづらい問題であった」とのことだった。入試センターの中間予想によると平均点は六二点、これまでで三番目に高い得点である。全体的に六〇―七〇点付近に集中し、最高・最低の幅が狭い形に分布する見込み。これは五十四年度入試結果に似ている。また、社会・理科Ⅱ科目による平均点が大きく異なり、例年はどではないが選択科目による有利不利が今年度もあったようだ。いろいろ問題を含む共通一次は、「廃止」の声もあるが受験科目や教科数が変化しながら今後も続くものと思われる。

季節の窓

高塙の松の雪さへ光浴び
いま若草の卒業の歌

林田　民男

厳冬の中で育ってきた高塙の校庭の松も春の光をいっぱいに浴びて若草（若者）の出発の歌を聞いている。

部説

マンガと時代

現在の私達の金銭の過ごしかたにマンガを読むという人はかなりいるのではないだろうか。今、マンガは私達と非常に密接な関係をもつといえる。本校生をその例にもれない。あるクラスでマンガをよく読むかという質問に全員が読むと答えたとのである。また自分で現在マンガを持っているかという質問にも全員が持っているという答えだった。

ところでマンガのブームはいつ始まったのではない。昭和四十五年頃に起こり以来ずっと続いてきた。昨年一年間のマンガ雑誌、マンガ本の発行数は十数億冊というが、その第一はマンガを息抜きに読む人が多いことがあげられる。現代にはいろいろ息抜きの物はあるがマンガにかなうものはないだろう。今私達が読んでいるマンガに発展したのに、もう一つの別の要素があるのではないだろうか。今私達が読んでいるマンガの最大の魅力に違いない。だとすればこの先ますますマンガブームは続いていくであろうと思う。

今の熱行部は、去年と比べて一年生の進出が目立った。また三月から六、七年度予算編成も始まるということで今後のがんばりが期待される。

三点

▼中国残留日本人孤児の第七次訪日団が肉親を探すために来日している話が最近はのテレビや新聞に出ている。彼らは肉親と再会し祖国日本に永住帰国することを夢と憧見していたが▼永住帰国する孤児達は日本と中国が国交を正常化した時から年々増加し続けている。しかし今まで四十年近く中国語を話してきた彼らにとっては「日本語」はまさに「国語」であり、生活していく上で大きな壁となっている。例えば自分の気持ちが相手に伝わらないほか、言葉が話せないために仕事にもけげん生活保護を受けている人も多い。彼らはこのような言葉の障害を乗り越えるため中には夜間中学に通っている人達がいる。一日でも早く日本語を覚えようと必死に努力をしているのだ▼こうしたことを記録した「雨よ降れ、お月さん」という本を、夜間中学の日本語教師の太田知恵子さんが書いている。これには中国から帰国してきた人達が日本語を学んで、日本の社会に入っていく過程が描かれている▼日本語を覚えることも含めて彼らが日本の社会がなかなか受け入れてくれない。意味のわからない日本語を言われて、それが後になって自分の悪口だったとわかったり、日本人なのに「中国人」と馬鹿にされたりする。一方中国では「日本鬼子（リーベンイン）」といわれてきたという。どの国でも異端者に対する冷たい扱いがあるものだ▼しかし「日本語」がわかりたいと中国の人に別されるのだろうか、彼らはもう四十を過ぎているので私達が英語を学ぶよりも数十倍もつらい。まして新しいことに挑戦していくことのすさまじさといっていい。中には中国で文字教育を受けたことのない人もいるというほどだ▼言葉を覚えなくては社会に参加できないというような重大な岐路に立たされたことのない私達だが、さて祖児達が必死になって覚えようとしている日本語を私達はどのように使っているのだろう。